里見八犬傳

第四輯

巻二

へ13
3416
17

四編巴考し図二

松野勝五郎

341 13

南總里見八犬傳第四輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第三十三面　小文吾夜麻衣を喪ふ　現八郎遠く良薬を求む

信乃見八丈五兵衛ホとも今蘆原なる人ホ呼みられ。三人齊一目をあつ。いのふせまーと躊躇程ホその人水際ゑ下拉く。艇く艦ホ進ミ近つ抱なる袱包を左のゑ人取なまく。頬かむりせーゑ拭を解つ額の汗を拭ふく艦ホ出掛るをゑ見べ見別人なもど犬田小文吾なるれば。文五兵衛ハ呆と果て腹ゑしげホ声とぬり立あホ不覚なり白物ガ祭祀の神酒ホ醉ゑ人場所も弘ゑもど戯言ーく。可惜膽を潰さーたゑ。然とも和郎ハ義も理も忘ーく。この人ゑの仇とゑる。底意ある故ホ。ゑ口走ゑうける袱と敦圉たくのひ懲せば見八ハ後方ゑう。袱ゑ接て

推禁め翁さのこゝろ腹こそゝめそ他人ゝ竊聞せゝるゝゝ俺們ゝ生死存亡再びこゝゝ
知るべゝゝゝ言長けれゝゝ洩易しゝそ我諷諫の誠心ゝゝんと和解く艦ゝ進ゝ出大田生
悪ゝゝゝや苦樂良歓幸不幸ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ長物語を初ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是則見八ぬのくこのやまく此彼の厄難奇遇彼玉のる。痣のる。孝心義膽異聞珍
説繰の顛末をうち聞くかいと怪しくも幸ある哉ることも亦その人と過世ある
べきしを知る歓び譬るふめをかし。とく出く對面せんとひつて又ありふかう。
婢児們を出しやすく彼人を伴つてよろづかの影護るべし。宿所の還りく物よく整へ
復あるふ事く迎るとれふ對面もるとも遅うしと胸の揣ぱく宿所よ退れ婢児們
あハ身の暇を取らしく出し遣つ暮かる日の便りよりけるべ門を鎖しを背門より
出て再びのふ事く又まぶ。あれ言果ぬ大人の長譚某ぐう人物こしけの説誘うるふ
とうハ傷痛くゆひれと意中を告まぶ丈五兵衛ハ笑つ冗うる頭を擲汝ハ年ある
ろけまとも親のハまく思慮深うとも知らざまぶ驚さまぶ腹まてしさふいらぬ
るのまぐ叱るハ親の役ぞよ誘賓客を伴ん先ふ走ぱく案内成せとのの
あくぶ立んとるを小丈吾霎時と推禁めたる黄昏ふりうまども市中ハ祇

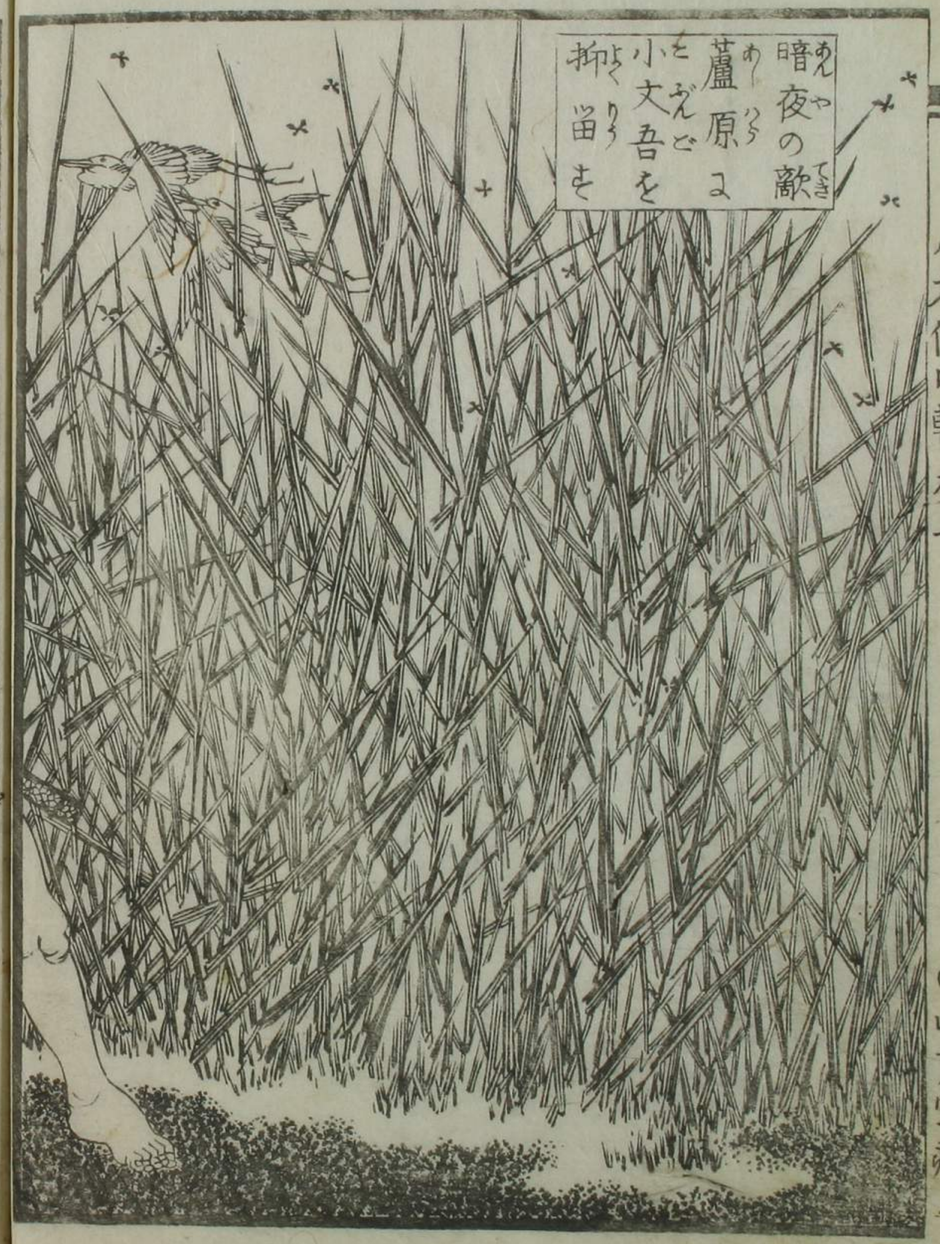
園會ふ往返ふ人も門毎ふ掛し燈籠もヨヌるふ大飼ぬの打扮の異ることハ
怪むべ。加以犬塚ぬの衣も袴も血ふ染うり。あれらのるを巡るをめて短長不便
の物ありべけまど單衣をのく来まり。まふ脱ぬえさ者ることのひつ件の袱包を
艙の板ふうち乗く推轉しつ解披げば内よりしく西口の刀さ見まを知り。當下
小丈吾ハ信乃と見八ふうち對ひこの榛搨の單衣も二田山木綿でしべ膚さり
あらるべけまど二彦ちのく脱更の衣の間ふ布の烈衣も二條狄三條あり。布の
中ふハ貝ま龍る膏藥もいう。そハ相撲とるのめ搨瘡ふも撲傷ふも用ひく
效あるのあるまぶ各位金瘡ふよく打くその布をのく巻ま就中犬塚ぬ腰の
間輕げくこの西刀ハいぬる比ある人より購得さ。西刀帯るこまちのふねどもその
價の稟かしく小を銘ありまども焼刀の匂ひ鋭刀ありべくいひしべ漫欲さふ買
とやまく親ふいく叱らまふ当坐ならも帯のべ幸ふくんと真ごちく件の

而刀を贈るゆゑん信乃八進寄て跪きて。恭しく受納め。嚮ゆハ某許我の御所ゑく。不意ゆ敵を受しゝ刀を取るゆ暇なく。且く拄て透を窺ひ先ゆ進ミ一人の刀を奪ふて戰ひつゝ。竟ゆ折ましれば。身ゆ寸鐵を帶びずゆ輙く更る衣のゝ下ゝでかくまで心代用のられし。賜ものハ千金なり。和殿の俠氣と勇力ハ翁の物語ゆ詳ゑ。ゆゑ只その義勇のゝ下ゝだ才幹遠慮も。ゑ見ゆハ兄なり。ゝゝ真の同胞なりとも有ゝかゞ恩義ゆ。そと大ゝ。あふぬ欲ひゆ見ハも亦小文吾が。繹倉卒の間ゆて。飽まぐ心を盡ゝゝ恵を謝ゝく信乃と共ゆ身ゆ衣を脱更て。迭ゆ扶てその浅痍を布ゆて卷々結ぶ程ゆ丈五兵衛ハ。ゑ子の才覚誉ら。ゝく足る親ゝゝ。欲ひ面ゆ見れく。信乃見ハが脱捨ゝる衣も袴も肱稍腮稍も。ゝゝゆ圍ゝく袱ゆ推包て端引結べ小文吾四下を見ゝ。ゝく。大人も賓客達を誘引ゝく還る。

某ハこの私を推流ゝく後ゝゝ退ゝん袱包ハそゞまゝゆゝく釣竿をゆく立る人。物ゝを忘ゝるゑゝと心をつゝ。ひ点頭つ信乃見ハを見ゝ。ゝく誘ゝる人。龍口ゝ。先ハ退ゝん。ゑ礼ハ許さゝ。ゑ人と艇ハ踏かゝる親の足を濡さゝ。ゝく。そゞまゝゆ腰を抱げ。小文吾よゆ。ゆゝ。放せくとゆ程ゆ扶て水際ゑ立ましゞ信乃見ハ後方ゝ。内ゑ。ゝ水際ゆを立てゝゝ大哥いろゝゝゆく翁共侶ゆ宿所で俟ん。現ゝいの私を遺ゝ措ハ彼草隱ゝゝ野鶏の尾を顕ゝゆ似ゝゝ。左右ゑ和殿を労ゝるのゝ心ゞゝゝゆゝ。ゝ小文吾ゆゝ。ゝゝゝ

刀を背へ推纏ふし。彼纜を解捨て船ゐ措る袱包をそぶまく取て楚と背負ひ底滴ゐ乾る舡の港板ゐ肩さ一へ是く推を程ゐ脛を越さまぐ何中へ推りく出し引向て力ゐ乗しく突放せば船も後ざまゐ揺めて走て大洋の波ぞ出ける。小文吾今へろろ易しと云ながらも徐かゐ舊の水際ゐ還りのぞりて濡せし足を拭ひけるまの時なや日ハ暮果て甲夜間ろゐ蘆の巣左右ゐ生茂りて黒白も判ねど心あてゐ石の上ゐ脱ぎえて草履を捞りて足ゐ引穿て蹇揚ろる袖を伸しく拭をりく塵うち拂ひ熟て迷ぬ如法夜ゐ家路ぞ辿て悠と立ろうんとろる程ゐ一夜だろ遣過して蘆原の邊ろ紺と縹を経緯ゐ織做ろ巨縞の浴衣又皂ぞ唐織乃帯を幅廣ゐ締びろ隻褄高く裾端折しく口の畳刀を跨へ藍鞍ろる拭ろく頬被せし一個の癖者忽然とあらる出て つくと透し見つ竊歩ろ小

文吾が後方ゐ跟て搔捞て瑞を丁と握て留て西三歩引戻せば此も驚て身を反り。揺一揺々振拂ふて見ろうんとろる肩尖を押て礒と衝背けて。ろりとうち掛て小文吾が背負ふる袱包の真中へ爪で引倒さんと争ふるゐ。包を一布引綻しゐ内ゐ落る麻衣のあやろぞ烏夜ゐ小文吾ハとも知らぬ。ろく焦燥身をふり回し。跳蒐て癖者が右の腕拉んと楚と食ろ食らんて怯まぎ振放ち抗る巻の早蕨と薄ゐ受るゐ煉の働ぞ撲へ論て推ぎ外を送ゐ防ぐぬ巻法の奥妙顔も認ぎ足下も進退不便の滅達打踢散す小石ゐ乗し掛て双方齊一踏に彼ハろる又此へかろる又遣錯しく幾歩ろ踏地ろく走て輾んとろく立留て送ゐ且く透し見つ寛定めろ癖者ハろるも打んと進む処ぞ徹と突出を小文吾が巻と進む郤合ゐて癖者ハ腹肚を大く撲て雲時も沒堪ぎ一声苦と叫びて。一間あまり返巡しく。


あんやの敵
蘆原ヨ
をぶんど
小文吾を
抑り留き

小文吾

尻居ゐ撞と倒まてる。音を変けども目ゆハ見ぬ小文吾ハ袱包の寛を固く引
よゐ程く結直しく歩早ゐ脱まてく宿呼ゑ還まけり。少選しく癖者ハ見まゐ復
ゑく身を起し。再び追ゑんと踏出せど足ゐ蹴掛る麻衣をゆがゑく取て拂く
見ゑ。烏夜ゐ翳しく遠し見ゑ。領死莞ゑとうち笑を衣推圍めて懐
夾めくゆを組頭を傾け。思按も路次も引ゑえく。塩濱のかゑ走去ぬかゑ
程ゐ文五兵衛ハ信乃見ハを伴ゑく。橋麓の宿呼ゐ還まゑ。躰く背門より
進入く彼此ゐ灯を点し。奥まゑる子舎ゐ件の二人を安措しく。ゑんゑ酒
食を安排し。いと叮嚀ゐ勧くゆゑ。暑熱ハ毎年のまゑまどゑ。この六月ハ毎
ゑまも雨ふゑとの間遠ゑまび旅ゑる人の勝どゑあり。ゑんこゑらゐ宿借るゆ稀
ゑり。さゑれ郷ゐ噂せし。彼鎌倉ゑる大先達念玉坊とゆ修験者のこゑの従
者をゆゐ返しく。ゑゐ宿ゐ只ひゑり。ゑゐ還留ゑくまどゑ。そまゑ濱邊ゐ赴

ゑく神輿洗を拝んしく亭牛の比ゑり出くゑまゑ。今宵ハ其処ゐ止宿しく翌ゑゑまび
かゑを求ゐとゑりまてゑれば。そまもう。婢児們のみる在ゑゐゑりゑ。不自由ゑゑゑゑ
ども家の内ゐ他人を置ねば。かゑゑゑ後ゑまゑるゑ。物のいひゑゑ折ゑハ常鳴しく
召更老人を労ゑゑゑく人氣をのゑ包ゑゑゑ。と正首ゐ慰まび信乃見ハハ把れる
箸を遽しく折敷ゐ置く恭しくゑ膝ゐ掛老人のゆゑゑるゑかゑ。叮
嚀ゐ饗応せゑゑ。厚意謝まゑゐ餘まあり。縁親戚朋友ゑり代凋落ゐ
及びゑゑ久ゑまど況沿ゑゑ人のゑまゑ。縁坐の祟を怕まゑゑく。誰ゑ一夕も宿まゑ
凡人の親ゑるゆ。その子の友のゆゐ揣ゑゑゑ義をゑゑく後難を憚ざる翁のゑゑハ
ゑゐゑゑゑ。さればゑく翁をゆゑゐ日を累く。倘連係まゑとあゑば後悔其処ゐ
立ゑまど。今郎のかゑりゆゑ。欽び感恩謝し。今宵一夕暗言明しく翌ハ未
明ゐ裝足まゑ。と齊一辞まゑを使メゆゑ。何ゑをゑゑゑゑゑん市人ゑまゑ

ゴまち亦武士の妻の腹ゴろ生ゴう。拙郎も俱ふ義を結ゴ各佐ゴと兄ゴあゴぶ。ゴ子と孰ゴ異ゴゴべ兄ゴハゴまゴぐも。ゴゴゴふゴを兄せゴゴゴもゴゴくもゴて舎藏ゴゴゴ

又今ゆうのるのみかげえく。あり燈燭ふさうしよ。まくうち見えく齊一感嘆をかく。
おのく玉をゐろちく舊の如くふ取納まえ。丈五兵衛ハ欽ゝげふ小文吾ふうち對ひ正
のるのハ曩ふいひるるぶ偽ざる我諦せる。緯の序ふ汝ぶ痣を二彦こみんせたのこ
いふ小文吾ゆのうち微笑こ某ぶ痣ふ所ゐろうゆこんせおねうせんハこ礼ゐれ
ども。親の言ハ背ゐえこ。許ゝ。ゆこといろけく帶引解く衣を退け。背向ふおうて
示ゐうぞ。丈五兵衛ハ行燈の灯口を其方ふ向うける。當下信乃見ハ目を斜
ふく。こゐを見るふ肥膏づゐる肌膚の白ゐハ雪をも欺くべ。背ふ灸の迹も
ちく。殿肉ふ黒ゐ痣あるゐ現その形牡丹ふ似う。兩人只顧稱賛ゝく。脱こる單衣を
うち被ゐて。小文吾ゆく袖をゐ。てゆ。ゐく帶を結びる。信乃ハこれをんうく。
昔異朝周の時。晉の獻公の公子重耳ハ國を追ゐ流浪ゝく。曹國を過りける。
曹共公名ハ襄重耳ハ駢ゝ脅のあるゐと仲ゝく竊ふこれをゐまく欲ゐその臣釐負羈

諫ゐ。ゐも聽こ。重耳が浴ゐるゐゐふ窺ゐ。淮南子ふハ曹君頻ふ重耳の駢脇なるを聞く。
重耳覚こ。これを恨ゐ。重耳が國ふ返り。位ふ即ふ及こ。遂ふ兵を起ゝく曹を伐
共公を虜ふ。ゐく。件の辱ふ報ゐのとのふ重耳ハ晉の文公ゐとゐり。國語史記ふ
載ゐ。ゐ書を讀ゐのハゐうゐとゐるゐども。犬田生ハこれと異え年来相撲を好ゐ
ゐつ。肌膚を見ゐとも嫌ひあらぶ。ゐれども。その見こゐの所をゐんせうる莫逆の
交ゐとゐるゐハ慢侮の咎めゐるゐぶやハゐるぶ。痣ハ見ゐり。とのゐつ偏祖ゐく示せば小文
吾ハ痣を見ゐくまゐく。奇えと稱ゐと。當下信乃ハ祖を斂ゐ。ゐるゐども。歎息ゝ只ハ
三友のゐうゐぞ。彼犬川荘助義任。假名額藏と呼ゐ。ゐの。痣も玉も亦相ゐ。
この圓坐ふ彼一人を解ゐるゐえ送憾ゐ。彼額藏の荘助ゐ人とゐうハ如此こん。
箇様ゐと。説示ゝ。この玉のゐ。痣のゐ。因果何ふの所以を知ゐねど。曩ふゐ母
の送愛ゐる与四郎と名づけゝ犬の亡骸を庭ゐ。梅樹の下ふ瘞ゝふその梅明

年実を結びて八房ゐ生さるゝ。その梅子ゐ丈字顕れ仁義礼智孝悌忠信の八个字。定めゐ讀まるゝとも不思議のるゐ揉くその実を藏めゐ。その核を今ゐ見るゐ丈字ハ乾る皮肉と共ゐ失て迹なくなるゝとそのの核ハ圓くして微小なる各秘藏の玉ゐ似たり。初彼梅の八房ゐ産るゝ時見出せしハ某と荘助のみ當時両人ゐ見るゐ。其の梅ゐ顕れて。丈字ハさまざまの形さへよく吾ホが玉ゐ似たれば。かゝる玉を秘藏もるゐ。外ゐも亦あるべし我わが必ずとゝろがるゐ異姓の兄弟ゐるべしとゐひしゝの毫差つゝ今又その犬飼犬田の両死友を得て。四人ゐあるべしとの外ゐもあるべしゐ。久後いよ〳〵懇しからん我が丈五兵衛ハ膝を進め耳を側て驚嘆して。ゐとゐ細ゐ説示せば丈五兵衛ハ膝を進め耳を側て驚嘆見ハ小丈吾も又ゐ奇異の懐をせざるゝ。過世の契を感悟して。額藏の荘助と。いと慕しくゐひて。かくて見ハ傷ゐあるける盃を改めて。信乃小丈吾ゐ勧めしゝ。

両人我が義を結び樂を共ゐせんとも憂を與ゐ同日ゐ生れ死ん同日ゐ死んと誓ふ丈五兵衛も亦我が義を有を増し盃を勧るゐ信乃見ハ刀瘡あるべ只盃を受て酒を喫まゐ。羽ハ是ちゝ命の親と又令郎小丈吾と異姓の兄弟ゐるハ義ゐ亦親と只盃を賜るべしと請ふて我が盃を盡さゐ。丈五兵衛ハ不材ゐ羞て。いよ〳〵信乃ホを敬ひて當下小丈吾も父ゐ對して某聊ゐ吉あり。ゆへ〳〵ども某在宿せざる日ハ是を心得用ひよ。昨今止宿の旅人ハ多くして彼修験者念玉坊翌ハ必ず来べし。只彼人のみ多くて。いぬる日ハ幡の相撲ゐ見ハ房ハ〳〵て恨て妹夫とそこの放さゐ殃危其外より發らん我が為も亦知るべくゐ。某世上の人氣を考て憎ゐとあるべ。この二彦を他所へ移さん。そも〳〵機ゐ臨て変ゐ応じて。せんとゐ。ゐとゐ。ゐとゐの為まゐ。のとゐ夜ゐ蘆原ゐて走て蒐て癖者のとゐ

かくもろ刃かなびるもとの知らず孫ども文五兵衛ハ寔ふ然るべと応けを。見ハ
それをうち笑ひ。現とのれを領ーする。千巣ハ滸我殿の郎方なり。且横堀在村ハ
その猜忌尤逞し。渠見ハ恙なく。犬塚生と義を結びく。逐電せと。他ども笑ひ
ぶ犬塚主ろ某を。見ハ憎むと甚ーかるん人の視聽を避るゆへ名を更るふまを
あり。さぶと見ハの見の字ハ養父の字の隻字なるふ擯斥ん。さたぶ只ハのの
玉ある故ふ。なるほど実父のうへを知るかまび見の字ヨ玉を加へけるより現ハと
唱へとるへいるふと。相譚へ信乃小文吾ハ見ハかる時ふも親を忘れぬ孝心を
感佩ーく。なるべーと応ーぶ見ハ今宵ハ郎と改め信乃も見く假字を告て
人の耳目を避ふけるまへのとれ夜ハなを深く子の半更欠とぶ死ふ頻ふ門を
敲くあのあも小文吾ハ戸口ふいるなく。呼門ハ誰そと問へその人ハ答へく声をぬり立
巳ハ塩濱の鹹四郎なり。神輿洗のかるまふ濱辺ぶ壮者共が大く鬨諍を起るふ

ふる。怪我せーめも亦ヨヌろう。そぶ中央ハの相撲の弟子もあるを又市川ふる。
山林房ハが弟子もあり。甲夜ふる甲乙截判ーく双方を和解ーとも敵ふを
他所のれるるべ小夜のを深く事届ぶ関取いるれくとも力くも扱ふく
ふるねう。黙計のれも待てをるをとくとのそぶせハ小文五吾ハ又て舌ち鳴
ら。折も折とく奴原が仂鬨諍を起るゆーそるるハ親仁が暑ふ中られ。
婢児ども走百病ーく人隊ふるるべ出るるく恒ふ中ぬるるぶら。神輿の
供奉ふ立ぶるるるさぶと敲ふハ市川人ふく山林が弟子ふるべ作のろ。ふるぬ
貌も沼るるるぶ汝を先へとく走ると追積ふるるゆん人騒ーの奴原ふるとのふ残
鹹四ハ笑ふ。然ぶ関取俟ふをう。ふるく朱ま者と期を推ふ足音高く
走去ふう。小文吾ハそぶまく小又子舎ふ赴ふく二彦ふ礼をるるぬ大人よ
今門邊ふく云云とのふるる。濱辺のふく癖ふく高声ふるべ作のえるん

毎年の祇園會に出ぬるなれば某が甲夜より籠をりさるに今宵ゆゑずも
疑ふ短夜のうゆめあまべ明もぞ還りかさるべし。大人は賓客達を臥さしく
戸鎖しく寢まり給へといふ文五兵衛も仕へまつる眉根をよせつ頭を傾け
壯者ぞ醉狂ふく。打り擲ともろこしふめづらしけるまでも敵ひは市
川人のうく快くぬ房八が弟子あるべ彼れより物ごとのうく枝ひや殖さけん
人の喧嘩を買ふかよ。とのべ小文吾微咲くそはろろ沼て結ろり貝腹
立る房八が横ぞ車を推ふ子とも直ある道を直ぞ某を何ろもべ死とぞ
をべ聽くべく懷紙をさわくと引裂くべ一條長く一條短く楮糾しく左ひぞ取り
小文吾よ和郎がもでの了簡と彼処へいひくく氣の立ての了簡とも
ぞ和郎が十六歳のとき桃權の犬太を結果し。その折ぞ誓言立て
人と爭ふとも人を打じ大刀を帶るとも刀を拔じとのひつ後ハ物諍ひを

せずとあれど此度の確執ハ仇めとなる。その腋刀を且おこせとのひつ取て膝ぞ横
文件の紙索を鍔の透と鋒ぞ引融くく楚と結びく傷ぞ措死小文吾が右の手を
胸前近く引よせて又紙索めく右の巨指李指の本さ紈結しく餘れる端と引裂れば
小文吾ハ呆果く石のえあふと問せも果ぞ文五兵衛も腋刀の鞘を握て膝ぞ
引立親の仇を子ハ知らじ紙索ハ脆きのるとも結びく刀を留るぞ引出
ごと抜くと沼るぞ國の法度も又親の教訓もこの紙索ぞ破らんと
ぞふ死破るいとも易けもど破ぞ非法不孝ぇ大刀ハ則男子の精神身を
護る德ぞあと人を砍ぞ死為ぞ佩も西ぞハ則使役の至宝萬事を辨る
德あるのく人を打べ死物ぞあるを縱ぞ腹立くく忍びくぞ死るのあ
ともぞの紙索の絶易く絶べ再び結びくと思ひえくく堪忍び親ぞ歎紀
被るぞと生平ぞまくく義理深ぞ庭訓ぞ小文吾ハ忝くて応も沼せぞ頭残

低く居させけ。信見現八もさの是我作なるく。必ずしも嘆賞し通微妙の教える。心とい小字ハ鎖ハ似さり。刀ハ心の鎖をさせば。是則忍く忍びく死をよく忍べ恨もなく悔もなく。幸あるく讐ハ。親ある者ぞ。誰又かくまぐ篤く諭まぐ死身を護る神も佛も。親ハまもるのあべ一ハ吾們既ハ二親ある。是第一の不幸なりかる教をなくハけてもいと美しくゆというまくく小文吾頭を撻短慮へ功を成くく。とロゆいくど一旦の怒ハその身を喪ふなと。箴らまし親の恩胸ハ的膽ハ徹う。こぐ大人さろ我安へ。某既ハ三四個の雋傑の下ハ列る過世あまけんよりを覚まべこの身ハ千金萬金えいっぐ。一旦の怒ハ乘しく親を忘れ友ハ負くの徳をあぐ。況倘この紙索を断とわぐ。親ハ勘當せるべく人こハも乘らべ。さでハ俠者といっくも要ず。其を忘れる為ハ被し紙索の指環も圓く治る喧嘩の和談夜ハさや深くゆべ某ハ罷え寝まもとのひろけく

一刀取く跨めぐ。文五兵衛頷ぬ。安堵ぬ。挑灯をのそ。立を推とめ。廿日あまりの月魄の隈る。夜ハ却ハ挑燈ハ煩し天明て戻りの遅くも。必ず過し我ぬ。といそく親を慰めく。信乃現ハハ辞し別れ。外面ハ立出ぬ。両人も共侶ハ身を起しく戸口ハ目送。文五兵衛ハ出る迹の樞戸を鎖し。扨盃盤をとり納め。子舎ハ帳を垂れく。信乃現ハを休ぬ。その身ハ納戸ハ退ぬく。睡んとまる程ハ丑三の鐘鍾とまぐ寝ぬ枕ハ響ぬ。却説その詰旦。文五兵衛ハとく起く。火を焼水を汲。早膳を調理く。信乃現ハ起ぬ我。候程ハ日ハいと高く昇り。ぬ巳の比ハ。ぬ小文吾ハいまぐ還ぬ。件の両客ハいまぐ覚ぬ。大ぬ疲労ぬ。熟睡まるるるんとぬべそまるく。霎時ぬ。あるけ。今ハ覚てもよる比。るんと子舎の間ある障子のほとるハ立ぬく。賓客達覚ぬ。日の

闌くゆと高き呼起せば現へに遠く。帳より出く障子を推開某は曉方より
とく覚てゆくもいつかせん大塚生は未明より。金瘡甚く腫疼て其苦腦も
亦甚く。痍は軍に炙所を外れて浅かれども。軀く愈んと思ひつるに俄頃に
腫疼るは。たゞの終日河風に吹暴されしゆゑ。破傷風に成るとて某さまくに
心を盡く看病んと欲すれども。腰著の藥龍もなく。よもすがら翁に告て
相譚ずとゆくりなく。代りもなき老人の朝の炊ぎ。こんを呼立んもいろ
ゆゑ翁とく醫師をこさば診るとも。せん術なくべし。且も紀藤と犬塚ぬの
いろ〳〵に默止ることの丈五兵衛うち駭て。そはいかゝ。昨夕
まで健かなりし。暗譚する人の料ぐるに病難のそは。破傷風のそなたも彼
樓閣より落て。撲傷の疼痛もあるべくんさば。あんず方は恙なくて已も此ニも
ひつよう。まづ容體を看てそとそゞろ裡面に進入り。垂る帳を顔りて推て大塚

生心地いかゞ物ほしうあるべやと。問ふて信乃も眼を見ひらき首を擧んとすれ
ども。ものいと堪ずなる息を吻て翁秋昨夕のまゝ。小丈吾とのいまゞ還らぬ
さきゆくゝ浮世を潛ぶ宿ぞあはれ。重病に嬰るこれいとも。あはれ人をさへ旁
胸にて。生ながらも死ぬるも天命なり。只うち擯て置ぬとのいあはれ又目を閉こう。
丈五兵衛は嘆息して退くに。死ぬ現へに目を注せて共侶に次の間に赴く。
膝つ死合て。声を潛めて。苦こゝ死容體に發熱爛ぬ爛ぐ如れも血色乃衰
さるは虚熱ゆゑ悪寒もあるん療治者病忽ちなべ本復へ死りなるべ。ものも田
舍のるゆゑ。あるべ名醫良藥よ。えゝけれども本道鍼治外科女醫者。按摩
導引の類まぐ。彼此に些もあるべ。さまべとく浮世を潛ぶ彼人を土地の醫師
に診せばこそ。某が兄なりける。那古七郎が相傳せし。破傷風の奇方あるとの
伝法に云。破傷風腫疼て日を經るまゝに瘡口愈ぬ或は血の走ると線の如く。

久しく止まず将に死んとすること年少き男女の鮮血各五合をとりて合してその瘡に沃ぎ洗へば疼痛ゆ立地に愈ゆ氣力も一日にして本復せり。その瘡は立地に愈ゆ氣力も一日にして本復せり。

譬ば帚をもて塵を拂ふが如しとの。某弱冠の比亡兄が口傳なりしが家の口碑に遺されあり。近属小文吾に傳授せり。されども鮮血五合を採るべき人も必死んとすれば其人死なずとのふとも錢あるを威勢あるべきに求ぐれば藥劑をあたへ身の處分のみぞやと問へば現に沈吟して血洗の方善とのふとも醫療は故ら仁術なるに人を害ずして藥劑を求めばとて不仁の術なるを忍びがたし所行なりとぞや。

某が武藝の師なるは古人二階松氏の筆記に軍陣藥餌の條あり。さるを方あり名はなれども某は肯ずして因て試ることもなし。但武藏なる志婆浦に破傷風の賣藥あり。その效驗の良劑なるを某少年なりし時同藩の某甲が中田の戰ひに深痍を負ひて破傷風にかかりけるを醫療その效なかりしを志婆

なる藥を試みるに立地に愈ゆ。志婆へは五里あまり六里ばかりなるを今より四日前に只顧に路次を急ぎ今宵四更ばかりに藥店の名は忘れたれども某彼処へ赴くべき素當ざるとはあれども潛めて告げうちに頭現その藥をもとめ。さるほどに月も金瘡あり炎暑を犯して遠く走りて恙なくもとの人の知ることなく事に悔なくて及ばず已濱邊に走り出でて小文吾を召して渠を志婆へ遣はしたるに某が赴くとも左も右もなくけるとのひたすらに立ちたる我現に急に推禁め哥々が今まぐかへりて來ざるを脫れて死なんはあるべきいかにもとのいひたるに山豆今まで彼処にあらんや。さる我弱き足を労して彼処に赴くべきを徒に時の移るを輙斛の窮を救ひがたし。某は微瘡に道中は笠もなく潛んで途にて支へたるも進退もどりて自由ならざるとのひとのひとを振りて足を踏立て示すぞ文五兵衛は

義に勇む志を感じて禁めもせず早飯をもとめあたへて。路費藥料を贈る。しば現八は激死髪を掻梳て膳に對ひ遠く箸を歛めてたちや立出んとする程に文五兵衛は飯行李に笠に脚絆に草鞋まで送もちて揃て遣与を現八受とりて。某岩の〜あるべ信乃よ辞別をせざるえ今云云の誂ありて志婆へ赴くことを告べ辞ふて必禁るべくんとぞ。その病苦を増のみせんか後に大塚の母を残るとあるべ翁云云と告てこそと密語あるべ縁頼に尻うちかけて草鞋の紐をきちんと結びて刀を取て腰に跨文五兵衛に辞別して笠深隠とうち載た背門より潛び出にけり。

第三十四回

栞崎は房八宿恨を霽を
藁塚に犬田急難救綾す

當惑る信乃が病著とそ。休ふ胸さへ身さへ暇なく小綱に炊く白粥の烹ばかりなれば日ごとに。薬藥素湯に勝んと貯藏のまゝに前に置る藥罐量る茶碗の水加減一盃半日に五〇居る。粥と湯液を勧めども。信乃は食氣あらねとて箸も沼とて藥も飲まで。現八が枕邊に久しくよりぬを訝まで。何如へゆくとと問るに文五兵衛は隠あんとて云云と報るに。信乃は仰て嘆息し。彼人も金瘡あり。俱に人目を忍のが分の漫に遠く出あるく。繹にあらぬ金を湯と湧く盛暑の真中に老たる人を労らしく使ふまでに四月に入るよりも。獨悔ふ初ふ。ゆゆしく四月に逼塞をしるに沼堪ず枕邊に。よもつ後邊に立選て勧る老の母もよもつよもつ。夏の日れ新も漸傾く。未の下刻よりふけて。文五兵衛は天ちと汗に帯布の衣を絞あんを

且く風を入れんとて外面へ退出し肩あり祖くを拭を背肩ふぐ如く拭ひつ。
胸のあらをとりて拭く。敷る袖の片ひあり待ぶ〳〵小文吾へ今まで何く
をゝのそ壮者ハ未遥る齢と共よ氣の長さよと獨言〳〵門傷へ安堂ん
と云る折ふ足音高く来るあり。それ欽と見ぶそ見めハあらぐ。走奴と
唱らく。荘官の使あり。店前よ来て誘音ふく。古那屋の檀那をゝ欽荘官殿
より火急の要用とく来ませと呼ぶる。丈五兵衛ハ折ふ〳〵と思へど驕ぐ
見久ふく。諜〳〵見人のぞある荘官殿の召状でも知るとぐ婢児们ハ例ぬ
任〳〵きのふる走百病〳〵一人もをそ。拙郎ハ濱の閑詩截判昨夕れまる
おぐ還ふ孤ぞ留守もぞ見る絶ふ。且く遅ふをまふして給とのせも果ぞ
眼を睹ぶ留守ハあるもあふぐともさ為ふ後ふとなんや。宿呼ふをぞいた
る方と素く今ぶく来ふとのまゝ誘共侶ふいそぐ〳〵。

框ふ尻をふく。丈五兵衛ハいそ〳〵く安堂ぬ胸裏ふ荘官よ召ふる。彼ぞ
ふん欽。このる欽とふひふく沈吟〳〵ふん。ふ〳〵ふん猶豫ふぐ〳〵。雲時まち及今
ゆん。とのひふく身を起〳〵奥を見せぐと出居の障子の開圖せふ〳〵く信乃ぐ
臥る子舎ふ起ふ。扨云云と密語ふ。荘官の宿呼へハふ〳〵半里許ぬや
あふんとくゆふく疾久ふぐ日を消ふとふあふぐ。そぐ程ふ小文吾も心久ふ来
ぐふふん前薬も素湯も枕辺る埋火ふ〳〵くあ。物ふ不自由ふぐ
ども且く見ふをとのふ信乃ハ枕を歌〳〵ゆふ眉をうち顰め。物の不便ハ
厭ふ足ふも。村の長ふ召ふふ〳〵ふあふ欽車病ふたのりげる見
命ふいふまぐ惜ぐ見現ハぐ今ふ。ぞふぬそ幸ふ見ふ〳〵ふかぐふ。
難義ふ及ぶともあぐ腹ふ見切ふ死んのふ。ふの首捕ふ連係の辜を脱れ見ふ〳〵。
とふを丈五兵衛ハあ〳〵忌〳〵見るふ所ふ。

○山清堂蔵

已ハ客店のるのあるとゝ毎月ホ二度も三度も旅人の名簿を紀さゝ。けのもとゝろ
の筋あるまゝ。濱の聞詩の発汁あらんよりあく扨ハ緩放ホ保養を更
と辞せゝ。慰めく又外面ホ立出ハ。自涂復の絹羽織畳一伜ヨ左ケホ把り。
右ヨ竹の皮鞋を縁ゝ投ゝ。誘ゝ下立ハ走奴ハ眠げホ目を
揚く。欠伸く。腕を捺り。先ホ立つ外ホ出ハ。文五兵衛ハ店前ヨ。簾二枚繰
ちつ。餘ゝ端ホ戸を引ゝ。くちつゝ拉く荘官の宿所を投くいそ。
程ホ犬田小文吾ハその夜さヨ。塩濱ホ赴て閑詩の為体を問究め。軈て市川
ある山林房八許人を遣く。和睦の義を相譚ふ。その人かゝ来く房八ハ宿
所ホ立ハ。由ゝ。
市川人を遣ゝ。房八竟ホ来ざゝ。和睦ハ後日のるホく傷け
らゝ。市川人を筵輿ホ乗せ。ヨ里人鞭傳く送ゝ遣ゝ。ヨ役ホ廿

二日を仇ホ消く。下晡ホ。小文吾ハ親の俟ら。賓客達ハ。
とふ。見くも胴ヨ絶ねかゝ。扱ひ果ゝ。ヨ家路を過ゝ。
さく。栞崎と字せ。並松原を。折忽地後ホ人あて。犬田等と
呼ゝ。小文吾呼く。久ゝ是則別人ある。山林房八ハ越の縮の麻衣ホ
萠ゝ。緋の縮面の犢鼻褌の前巾を透ゝ。銀の銃輪ゝ長き
一刀を瑞降ホ挿ゝ。皂苞の単羽織を細く畳く帯ホ。夕陽を遮ん
為ゝ。白布の面拭を頭ホ巻く。端を額の上ホ巻。朱緒の桐の下駄を
穿く。その性若く悪く知ねど。色白ホく骨法鄙ゝ。現文五兵衛ハ比興く
如く。大塚信乃ホ似ゝ。小文吾ハ。くちく微咲ゝ誰ゝ。
川の使ゝ。神輿洗の扮撰く。ゝの里人ゝ。ゝの里人ゝ。ホ市
昨夕もけゝ人橋渡く。召ゝ。面出く。ゝ。他人のるゝ。

和主が分まで骨折て。半治めて。といふせも果ず。冷笑ひそたゝる骨を折てつゝん。あるとも今途で。仆げば歇よ浅痍多。市川人八三人まで。おのく凛る痍八重る実で等分ふ理をのこて。遽りも沼せど引ゐみる和主と已ふへ鰯鍋内證のるゆゝ蓋をて。移香立ぬ樹もあゝん彼截判の片ゆ打房八を女房の兄ふ怕まて。知りても知らぬ負ゝく受とゞせ。と世間の人ふいつまてゝ。つゞ一郷ゆ簸債みく。背負ゆく退ても路八ゐ。死ても名折と生ての恥辱今蒔ゐ為を確執の種花をのこねば分ゞる立ぬ思按決めく挨拶せよと嗜り立れど。此ても騒ぐを房八そまゝゝそるとの僻案甲乙つけくゐみ。尼ゆ打ともいわれやせん。一夜一日ゆまてども来ざゐ。そゐるとを達くゐるとゐ送ゝ。まるゐ花ゐゞやと。のゐをゞ聴くゞ袖巻揚。そゝのひ釈ふゐるゐと秋侠骨の捐ゐ。已ゐまゞのゐゞゐふ扱ゐくもゐゞやゝと侮らゐ扱れゐる故事来歴いゐゞも知ゐ。ゐまゞゐのぬる日の八幡の晴相撲美事和主ふ負ゐまゝ生涯土俵ふ足踏みゞと。ゐの絶く個ゐぬくとのゐく。ゆ拭掻取く。剥ゐる月額礑と拊親の異見を外ゆく。けゆまで惜く額髪剥落く。ゐる青治郎倘武士ゐゞゐ弓箭を乗く。髮心入道せく。ゐゐゐふ小出屋此度の確執相撲の日ゆく怖氣づゐく。生ゐく里ふ肩入まゞゐ。潰ゐゐ。釋迦ゞも還俗せゞゝんや。夫婦八素く予ゐ合せゆ女房ゐゐまゞ。阿男とゐゐゐゐ黒白判ゐ覚期せゐと。競ひ蒐ゐゞ。爭ゐゞゐゐゐく逆上せく。欣額髪まで剥落く。得度八ゐんゆゞく男態形とゐゐゐゐゐく。相撲の遺恨を表法ゐく返ゐゐゐゐゐゞ大人亂ゐく。けゆゐ吾侍ふ夏ゐゐゐふゆゐゐゐゐゞ豆又小メん今宵一宿預けよと和解く別ゐんとゐまゞゐ。缺を楚と引とゞゐ。物体つけく滑う。逃て脱ゐゐ今ゐで。挨拶せゞゐと敦圍ゐ。後へ蹴陽る裳と個ゞ。端折高く褄取ゐ。小丈吾八今ゐふ。ゆてゐまく沈吟く。ゐゐゞ又いゐふ挨拶ゐゐ十分ふゐゐゐ

小文吾

庭訓を守て
こぶんど
小文吾
狼藉を忍ぶ
ふさ八

面をもこれ出さんと向へば取る袂を放ち。斯しく起きと身を反て刀を見りと拔く。臂推留て出を拔せじ顔つくづくとうち目成て酒の上過されく物ゆや程の彼又見れば。人を殺せば身を殺す。親の歎死も子のうもいひみじやと。若く取る臂を衝放せばいよ〳〵逼く下駄脱捨小文吾刀ゐ怯き〳〵狂生醉扱い胸悪し。和郎ハ何時房八ゐ酒を盛て醉〳〵る。親の歎死も子のうも豫く期〳〵る一生懸命。こゝく勝負を決せよと声ふて絞る汗と共に玉散る如見刀の光。又拔うけく詰よまとべ。小文吾も今へ堪ねて共に拔んとすを掛る鍔際見まべ親の慈悲敵〳〵紙索ゐ禁らまく怒ともゐ紙歛め房八何ともいぐ〳〵小文吾ハ一個の親あまふうる命めて然る敵ゐ思ふるゝ。とのゐ房八呆れ果て。ゐうまで呵ことうち笑ひ長死刀を光らしても要緊の時ハ汚も拔ぢ。その苦のるもあまと見まべ紙索ゐ留めうとだろり

刀ゐ奪そ〳〵くハ俱ゐ拳の碎るまで打あうく運を試んと来よ進めと諸肩推祖き足踏鳴らく立對へども小文吾ハ般らま〳〵指の紙索のいと惜さゐ立在る侭らを又見頭を低く見ふまど房八ゐ見かう見〳〵又躊然とうち笑ひ小文吾ゐ立合ざる相撲とちがうく命ゐ勝負ゐ拳もおそろ〳〵紙男態ハ大見ふても果つ見の撞銀甜瓜見ゐみぢろまぐ味ひゐ。かぐろまの臆病者を人ゐ〳〵く打ちべなのくゐ拳を穢さん是を啖へと足を蹈〳〵向腡撲地と尻居ゐ蹴居く土足を肩ゐ踏被こう。小文吾ハ片膝を衝こうまのゐ手を抗てその足楚と受とあう向上る面色朱を注ぐ疾視逼てぞ堪ふる見怒を忍べとゐまこる庭訓ゐ悖も親ゐハ不孝の子とちがうん友ゐハ不信と疎まん。昨夕立こる誓言も紙索も彩らず破らじと思ひうへせどかうらぬのゐ。人をも身をも恨の涙。見せ〳〵と汗ゐ紛らく〳〵と落ち髪の乱髪顔を背けくつひみう。當下樹蔭ゐ躱ひく。綜の中を

覽るのあるを是則鎌倉の修驗觀得なり。滿面に笑ひながら見上げて禹歩し。ほとりを近く立よりて扇を颯と推ひらきて房八を堅ゐあるが横めあるがて背後拊適愛さ心地よ。かくてそいねる日の相撲の恥を雪ぐ且奇妙さ。と小鼻を張て誉ぶ房八誇負は全體八幡の相撲に負る筈でなかりしが俄頃に轉筋して思ひぬ怪我ぐ此奴が功名。なん身も先途の腰愈に些踏臭と被りたる足をおろ〳〵立昏ぶ觀得ハちそろく。顏さ〳〵訓ぶて西三歩逡巡〳〵頭をうち掉。いかくこまたいとぬる。一口ゆに頬のや燒んの窮敵八追ふべくも。和敵が十分をそのけこまぶ吾倩が百遍踢ふるよろ。拾別に痛つん尾を曳大田ハ打栄ゆ。ちさこの佐ふうち措く。例の酒肆ぐ一献酌んとくいまどやと猪口べ房八ハ衣領を歛めく脱捨一下駄穿ちて又小丈吾が傍ちを近く立下るまく佶と疾視大田と且でいまぐ済ぬぞよいぐをるのあるあるぶぞそかられ今宵いあるとくいん。

かをくしをさんとゆらく寢刃あり〳〵く俟てなんその折留守を使ふをとのと憎さげに期を推く先に立る觀得どうちゆるてゆるに市中の酒肆へとくそ伴る且〳〵小丈吾ハ頭を擡げる武又元仰さらひ倩く又ら〳〵ども安ら〳〵ぬ公は林搔流を汗の麻衣あさまりさこるぶ身ゆそとゆう屋くに立あぶろく裾に沸く沙を拂ふく襟を合〳〵さ房ゆも房八が日ごろに似げる元五法の挙動八幡の相撲を根ふうちく身をも親をも忘れ久し物の勝負八爭ひの端緒と知れど名を好く誉を釣るハるぶく世の人の情といひぐら原を他人の爭ひを身に引受て妹夫とう〳〵ゆ怨を結びる皆是吾倩の徳ゆ元渠いつたろすふ狂ふとも打倒さんゆ難くもあらねど敵みふうぬ親の戒知〳〵ぬ妹へ兄が慈悲を忘ゆ互の幸ひ身ぶ元ろのうへぶぐとのふちろを人ちぐ笑ひもまべ挾〳〵もせん相撲に負ぬ〳〵れゆ〳〵も只勝う元八馬鹿者の五法ゆ元と嗟嘆〳〵く乱れ髪を

くれ捨て再び歩をいそぐ〳〵て邁と僅に三町ばかりを蒿塚のほとりより捕手の兵八九人簇々と走り出て逃さじ遣らじと捕籠う。忽ちみけるをれば小文吾は敬禹紀あぐら厥邉に紅く花さえる。帕痒樹を小盾にうり某犯せる罪あれば叩ひ人を認違へ捕る徳のひそと辞せず〳〵陳まをれ小文吾爭ふを。と声高やかに呼ばわり。野猪束せ〳〵一個の武士この地の荘官千鞆檀内を先に立て。文五兵衛を搦捕まく。駄兵ホに牽せる。物蔭より顕れ出るを小文吾は佶と見て。再び駭く親の縲絏ふかのきそもいふかまそもいふ。やらまじ其処ふつゝ件の武士はさもこそと間近く立對ひ。小文吾。はまこは是辭我殿の御内ゆく武者長を奉る新織帆太夫敦光なる。識まる。癖者大塚信乃とはいかのきのかゝるのるふよりまく。御所を騒〳〵奉り。捕ひの兵大飼見八と組撃〳〵芳流閣の屋の棟より。河原面ふ轟れ〳〵。舩の中ふ滾落く。迹を暗〳〵落亡さを

はまとゆく。某追捕の最命を受たり。昨夕通宵路次を急ぎ水ふ索め陸ふ攻へ郷ふはの浦ふ来く。且く長途の疲労を休へ荘官檀内ふ相潭く。竊ふ信乃を索る程ふ件の舩を。葛浦の澳ふ漂ひさけ辛〳〵これを獲う。その舩ふ〳〵その人を〳〵。ふのふ信乃ハ見ハを水中ふ推投く陸より逃れ去を。彼の欲ちてこの浦ふ潜居るとやあらんと。やがて檀内ふちて又沿さく市中村落ふ分く。竊ふ穿鑿をそけふ汝が親古那屋文五兵衛が宿所ふ行く。昨夕両個の旅客泊れりその一個を今朝立去をぬ又一個の滞留せを此彼共ふ武士なりと。綽詳ふ伝へ聞てあり。文五兵衛と荘官許召のぼく彼旅客の相貌骨法又その滞留の事の趣。厳ふ質問ふ返答甚胡論へあふ疑を累れば彼滞留の旅客こそ正〳〵大塚信乃なめをを偽ぶ文五兵衛も亦是同罪ふるゆふ。特と縛めて兵共ふ牽去さ〳〵。

檀内を郷導とす。まことみづから古那屋ゐ辺に家捜せんとく来たる折檀内遥ゐ
汝を見て彼ハ小丈吾と呼るゝゐ丈五兵衛が冢子と告るゐよりまこと。これを
識まつる。放ちたゞちゐ縛ゐ鞫兵ゐ下知して遊留め。縛のあくゐ及ること
親の縲絏を救んと思ひて汝先ゐ進みて件の旅客を搦捕せよ異議ゐ及
ず親を本人身を縛の索ゐ被んと。あるゐ隨ゐとくまつる旅人の模様ハいか
ゆゑぞと威しゐ賺しゐ説示せば檀内も亦進み出小丈吾豫て知るたらん
當領主千葉殿ハ御所の御方ゐをまたまゐ領主の下知ゐあるゐ縛忽ゐ
ちまちゐ後の外を脱とらんかとゐも御所ざるの郡郡を多騒せるゐ
ちのびゐ穿鑿しく信乃を搦めとと仰せ下とそかれば一旦彼癖者を癖者と
知りまつらゐ宿貸するゐ者とゐ自訴せばその外咎免さまとく賞禄を
賜ん素より信乃ゐ武藝抜群勇力無雙の仕ゑあるゐ式ゐ詐計を搦

捕る欲不意を撃とく刺殺しその首捕く献らば親の縲絏を釋のゝゐ御
所の御感ゐ預らんその力の名誉領主忠郎和郎ゐ巻法と相撲のく名代
近郷ゐ知るとしるべや技も力もかゝる時播くとそ國益ゐ思按を決めく
ん報せよ寔ゐ大変のれそと名利ゐ喩を口功者捕ゐの尾頭ゐ使ふべゐ底心
とそ仕ゑる小丈吾ハ目ゐ耳ゐ見ること就き仕くゐ就き身ゐ苦しゐ親のうへ
義を結びる友のゐ浮沈存亡この時ゑ何とのゐ思ゐ輾しく被く壓く呪心地ハ
さまで色ゐも出さまで頭を擡仰の競悉けるひぬ。ゐるまゐ某ハきのゐの
祇園會ゐ濟遷ゐ推びく昨夕もけふも宿所ゐ在らず目今皈宅の中途
ゆく不慮ゐ外を蒙りて親の縲絏ゐ驚くのゝかまびその旅客ハ武士ゑ
百姓ゐゑんのまゞゐもせまじ仕もせまじそゐとまゐかくもあまゐ親の縲絏を放させ
ゐまじ。ゐくゐ素内とうまゐまつる。ゐん先ゐ進んとゐゐ願しゐ所ゐるまじゐ。その

る虚説ゆゑ昨夕泊し旅客ゐる家捜をせざるを外ゆをいでべせん為るき板戸ゐ低く檐藁屋も賤しかめゆ城廓證据分明あるざるゐ貪之隠を家の内を隈もなく捜さるるゐ恥ゆべき数なるねども一丈夫人ゐ使者といふれる名を惜めば歎くもなれ餘あるゐふるん加旃その癖者ゐ滞留ゐるるるる武藝勇力捷るる大刀風ゐ鋭るるんさるべヨ勢をのてるるも捕逃さるるるるるる二十六計欺詐を善とす。ゐん隊勢を遠離る某ゐ任しるべ何支も親のゐるるるを宿所ゐ立る久るるその旅客ゐは在るべ詐計ゐ搦捕ん縱その便を為むるるる酒式強く醉臥させ寢首を捕る献んこの殘ハいるるるるるるるる當坐を脱るる才子の辯舌説賺さるるる帆大夫ハ然んるるる打頷ゐ汝ゐ意見説得る理あり。信乃ハ万夫無當の勇あるるるる隊兵ゐ砍るるるるる此度も亦ゐ捕るるる毛を吹る疵を求る過失るるるるるるる現後

難を脱るるるるるるるるる且く汝ゐ任せんよるるるるるるる檀内を見るるるる骨法圖ゐるるるるるるるる武士まるるるるるるる百姓まるるるるるる旅客の年紀全骨るるるるるるるるる圖ゐ引合るるるるる一毫も似るるるるるる詐計寄る搦捕るるるるるるる錯認慢るるるるるるる人たるるるるるる外市中の出口。江河の船場へ土兵を借加る嚴重ゐ守るるるるるるるるるるるるる遲るるるるるる今宵一夕を限るるるるるるるるるるるるる骨法圖を隊兵るるるるるるるるるるるるる遮与ゐるるるるるるるるるるるるる小丈吾るるるるるるるるるるるるる受るるるるるるるるるるるるる巻て懷へるるるるるるるるるるるるる入るるるるるるるるるるるるる襟元緒ひ既ゐかるるるるるるるるるるるるる命るるるるるるるるるるるるる奉公を仕るるるるるるるるるるるるる願ゐハ親の縁綱を固るるるるるるるるるるるるる某ゐ預るるるるるるるるるるるるる果るるるるるるるるるるるるる帆大夫ハ高るるるるるるるるるるるるる頭と共ゐ声を高るるるるるるるるるるるるる否るるるるるるるるるるるるる稱ぬるるるるるるるるるるるるる親をその子ゐ子をその親ゐ委ねるるるるるるるるるるるるる律令の本文汝るるるるるるるるるるるるる一ツ穴るるるるるるるるるるるるる絡るるるるるるるるるるるるる欺虚るるるるるるるるるるるるる乗るるるるるるるるるるるるる癖者信乃を搦捕るるるるるるるるるるるるる首捕るるるるるるるるるるるるる

帆太夫金ヲ
小文吾を
捕んと
小文吾

荘官だん内

西箇ハ一箇功あるまく文五兵衛ハ人保之親を救ふも罪あるもまぐく汝が心ハ
あらんそ残今願ふところと叱懲せば小文吾ハ忽地望を失ふく嘆息しつ
頭を低又いふよりもあるをけり。當下荘官擅内ハ帆大夫ハうち對ひたる
曛昏ハあるまくハ彼癖者ハ夜ハ紛まく逃亡るるものあるとてうハ小文吾を
返さぬのひて出口の戍卒肝要ちくんとのいぶ帆大夫後方を見久を現日ハ海ハ
没んとるまり。小文吾ハ且く放まるーつる義ハ偽あくハ功を立て荘官
許まるーー出よとく邁とそぐーく又文五兵衛を牽せる。擅内ハ宿所へとく
衆皆齊一身を起せば小文吾ハ何とぞるを応ふを見ど立ちて目送る子
よりと親ちるをのいひぐふくを度見ぐるるるハ中ぐ暮ねども心の闇る
迷ひつ後人牽る縛索未の歩申過く鶏ハ物ハ別るの悲を誰ぐう人告タ
烏宿巣をあハ引裂れ歎ハの杜欲願事をいぐ心ハ千早振神ハを知ぬ

子ハ親の為ハ隠ーくいと直ハ道のあくてくかるさとあるさ
のあるひるとまるべ追ふるくく跌く老の背影杖ハるるぐ呉ハ行の嗾ハ数ハ
隔らと看ーんをどるるふけを小文吾ハ愀然と胷を拊くるち歎ハ六十ハ迫き
親の縲紲を釋と易く又難ハ義の一字も亦重ハ故あり早く艱苦を忍び受
かくもーく救ごんや父をゆく彼人ハも綽安らけく恙ハ尋思るるとるハ
組さつくとるる人相の鐘の声まる恒るぬ胸ハ心く天ち仰ぎられぐる女ー
くをうるく物をるひるり宿所のるもるのまるーまらハ躊躇とるるみぐるる諫く
端折ー裙より長ハ腕ハも綽突詰ー二鞋の家路をさーくいそぐハも倘間諜者を
ハく跟らくとあるりるんとるべ四下ハ眼ハ配る心隙ハ折るるるべ夕の風の涼き
ハも汗ハ噴ぐくかるる来ハ檐下近くるる隨ハと人ハるべ店前ハ過半簾ハ垂籠て
寂蓼とるる裡面いと暗ハ戸袋ハ戸一枚繰掛ハる戸を周く進入りまぐ燈火を

とひとまどちさくそゞ伏庵漏へ起けゝ家ゝびゝる燧盒火を鑽音も外に憚ゝ二三
ある行燈に辛じて移とりく一箇ハ店前にまえ一箇ハ引提ゝ子舎に赴くに現ハも
を左ゝゝ右ゝく信乃只起とり病臥うゝゝハのゝに驚ゝゝまゝゝその母ゝを訊るゝ信乃ハ
母ゝ起ゝるゝゝゝゝその金瘡の曉ゝゝゝ猛に腫疼ゝゝ苦悩堪ゝゝゝゝゝ又現ハ薬を
求んとゝ潛ゝ武藏ゝゝ志婆浦に赴ゝを信乃ハ後に知ゝゝゝゝ又文五兵衛養に往
官許ゝゝゝゝゝゝゝゝを告るに呼吸せゝく声細ゝゝ小文吾ハ憂の中に又
一層の憂をまして苦しさ限りなゝと親のゝにさゝゝ房ハがゝのまでも報るに便ゝゝ
けゝゝゝゝゝ慰めく慮く火を起く粥を烹復く勸るに信乃ハその疼痛の
些こしおこりこゝゝめゝ絶に著をゝゝ折ゝゝ店前ゝゝ簾を揭ゝ誰もをゝゝゝゝ
ゝと呼ゝく裡面に入ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ